

テキスト『正邪録（3）』

## 古文書にみる幕末社会

聖徳大学オープンアカデミー公開講座

はじめに

二〇〇三年、本学の生涯学習施設聖徳大学オープン・アカデミー(以下、通称SOAと表記する)で「古文書にみる幕末社会」をテーマに、古文書解読講座を担当するようになって、一四年が経った。その短くもない講座には、開設間もないころからお付き合いをいただいている方々も少なからずいらっしやる。この場合は、担当者にとつても、「日々の研鑽を怠るな」という警咳を与えてくださる貴重な場ともなっている。

受講当初は、全くの初心者ないしは、初心者に近い方々も、今では、一人前の読み手となり、中には、当方以上に実力を付けられた方も何人もいらっしやる。それは、担当者にとつても密やかな誇りとなっている。

今まで読んできた史料は、わたくしが、千葉県史の編纂業務に携わっていたこともあって、当初は千葉県文書館所蔵の「おとずれ文庫」中の王政復古当時の布達類、第二次長州征伐の際の戦闘情報を書いた情報集、さらには真忠組事件関係史料をはじめ、県史でお世話になった先輩方を通じてご教示いただいた上総地域の一連の文書群(なかには、茂原にある高橋喜惣治家に所蔵されていた豎冊文書で、禁門の変直後に、一橋慶喜が江戸本邸を事実上切り盛りしていた義母にあたる徳信院に變の状況を書き認めた書翰の写しもあった)、その他にも整理に関わった一橋徳川家史料中の文書群マイクロフィルム化されていた佐倉堀田家文書をテキストにして解読したこともあった。

当初は、くずし字のきれいなもの、内容の分かりやすいもの、といった選択基準でテキストに相応しい史料を探し、選んでいたが、受講生の方々の力量が向上するにつれて、そうした配慮は後景に退き、内容の面白いもの、興味深いものをテキストに選ぶようになった。事前の準備に労力を割かれるようになっていったが、その分担当者であるわたくしの関心も深まり、より一層楽しく感じられるようになった。

そうなってくると、受講生の方々の間から史料の提供を受けることが出てきたり、一年に一度実施している古文書閲覧も兼ねた施設(毎年一度史料を見せて下さる歴史館や博物館を訪ねている)見学で、見せていただいた史料をテキストに使用することも出てくるようになった。古河歴史博物館の国指定重要文化財・鷹見泉石関係資料からオランダ風説書、鷹見泉石の意見書、親交のあった渡辺華山書翰などをテキストとし、近世後期の蘭学の役割、近世後期から幕末にかけての対外情報の豊富さについて認識を新たにするという知見も得ることができた。また埼玉県立歴史と民俗の博物館を訪れた際には特設展に展示されていた慶応二(一八六六)年六月、秩父で起こった世直し一揆の情報集である、「丙寅土寇日記・丙寅晩夏松陰筆録」をお借りして全冊翻刻したことも記憶に新しい。

そこでは情報集を作成した松陰は、どこでこの情報集を書いていたのか、その可能性のある場所を探る、といった文書の解読本来の学習からは、離れてはいるものの、地図を広げ、いろいろ詮索したこと、その過程で、埼玉の地域的特性についても学ぶことができたこと、学習の範囲は文書解読にとどまらない、広がりをもつものともなっていた(古文書読解はあくまで歴史を復元するツールであって、本来古文書学習とはそうした広がりをもつものである、というのが歴史学を生業とするわたくしなりの自負である)。

そうしたおり、今年がSOA開設二五周年にあたることから、いくつかの講座をホームページで紹介するという話があることを聞き、この機会にこれまで読んできた史料の翻刻をホームページにアップしてもらって、わたくしたちの成果を広く社会に還元することを通じて、史料を共有するとともに、ご批判をいただき、今後の学習に生かしていきたい、という希望が、受講生の方々の間から提案された。その際、何を最初にアップするか、というところで、本講座で最もボリュームがあり、内容も豊富であった、幕末の秋田藩士が書き遺した情報集である『正邪録』（全三巻）の翻刻を選んで、その準備に取り掛かった。電子媒体ならではのさまざまな条件があること、パソコン技術に通暁していないこと、など種々の壁にぶつかりつつも、SOA事務局である生涯学習課の方のご指導をいただきながら、何とかアップにこぎつけることができた。

今回アップする『正邪録』第一巻は、安政四（一八五七）年冬から文久三（一八六三）年四月までを対象にしたもので、主に京都の政情を中心に、国政に関わる政治情報が、秋田藩という「眼」、を通してまとめられている。幕末という時代をその時代のなかで実感する上でも、好個の史料といえよう。

今後、第二巻・第三巻の順でアップしていく予定で、引き続きその作業を進めていく予定である。さらにその後も、講座で読み上げた史料を順次アップしながら、ページを繙いてくださった皆さんのご批判を糧に学習を続けていきたい、と考えている。

最後になりましたが、アップに向けての作業などに有形・無形のご協力と励ましをいただきました。「古文書にみる幕末社会」にご参加いただいている受講生の皆様に改めて感謝申し上げます。そして、この間、一貫して相談に乗っていただき、些細な技術的な問題にさえ、対応に苦慮する私たちを温かく見守り、最後まであきらめることなくご指導いただいた、生涯学習課の中原弘喜さんに、改めて感謝いたしますとともに、厚くお礼申し上げます。

二〇一九年十月

SOA講座「古文書にみる幕末社会」

担当

文学部教授

大庭 邦彦

## テキスト『正邪録』について

貝塚家所蔵になる『正邪録』は三巻からなっており、幕末期に同家の当主であった清直が取まとめた情報集である。

清直は、出羽久保田（秋田）藩に仕える武士で、当時、政務所物書という役職に就いており、職務上、藩庁に上げられる種々の情報を知りうる立場にあった。

『正邪録』は、清直が、そうした情報を職務の合間に筆録したものと思われる。そのことは、第一巻の最初に収載されている水戸斉昭が当時閑白であった九条尚忠に提出した建言書を筆写した最後に「万延元年四月十四日 宿直之時写終ぬ 貝塚清直」と付記しているところからもうかがえる。

『正邪録』全三巻を概観してみると

一 第一巻 安政四（一八五七）年冬〜文久二（一八六二）年四月

二 第二巻 文久三（一八六三）年五月〜同年九月

三 第三巻 文久三（一八六三）年十一月〜慶応元（一八六五）年九月

と、各巻はおよそ時代順に編まれており、収載されている内容をみると孝明天皇の勅書、それに対する十四代将軍家茂の請書をはじめ、水戸斉昭や毛利敬親といった有力大名層の意見書・歎願書、幕府の出した触達類、各藩探索方の収集した情報の聞き書きから、横浜の貿易商人の老中への駕籠訴状、さらには日本橋に張り出された張り札、投げ文に至るまで、幅広い階層の人々が書き記した情報が多様に収載されている。

そしてそれらは、ホットな政治問題に関わる情報であることから、当時の政治状況のなかで、藩の政治的立場を決定していかなければならなかった諸藩の情報収集がどのような内容と質を有していたかを検討するうえで、意義ある史料と考えることができる。いま一点、私たちは、幕末の著名な政治的事件がどのようなものであり、その歴史的意義が何であったかについては、既に既知の歴史事項として理解できている。しかし、その歴史的事件の只中にリアルタイムで遭遇していた人間たちにとって、その事件がどのようなものであったのか、その全貌を俯瞰しながら客観的に理解することが如何に困難なものであったかが、逆によく分かるような事例も読み取れる。

ちなみに『正邪録』は、清直一人の手になるものではない。読んでいただければ分かるが、手の異なる複数の記録者がいたと思われる。こうした点を勘案すれば、『正邪録』は、貝塚清直の個人的な作というよりも、久保田藩の政治的必要性から清直の職務に関わって作成された情報集という、半ば公的な性格を有する記録と考えることができるかもしれない。

正邪録全三巻の内、第一巻と第二巻は既に公開を終えたところであるが参考のためその目次を左に掲げる

## 正邪録（1）の目次

- (一) 水府老公より琵琶の函入閑白殿下秘奏之策……………
- (二) 桜田門外の変 井伊大老襲撃に係した浪士らの辞世……………
- (三) 桜田門外の変 井伊大老を襲撃した浪士の懐中した斬姦状……………

- (四) 井伊大老を失った彦根藩伺い書・・・・・・・・・・・・・・・・
- (五) 横濱異国船交易商人越前屋彦右衛門籠訴の訴状・・・・・・・・
- (六) 芝薩摩藩邸に押し掛けた浪士37人一件・・・・・・・・・・・・
- (七) 東禅寺事件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (八) 露西亜船対馬不法上陸一件・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (九) 坂下門外の変 関連記事(大橋訥庵関係も含む)・・・・・・・・
- (十) 坂下門外の変 斬姦趣意書・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (十一) 文久元年伊勢神宮近海英夷測量一件・・・・・・・・・・・・
- (十二) 藤堂様より測量之儀被仰立候書付之写・・・・・・・・・・・・
- (十三) 文久二年修理大夫実父嶋津和泉事江戸表江差立候届書・・・・
- (十四) 松平美濃守参府途上で病差發候二付病氣加療の為帰国願・・・・
- (十五) 長州公御書出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (十六) 長州公より熊本公へ被仰入候御趣意書・・・・・・・・・・・・
- (十七) 道路之説越人筆記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (十八) 当戊正月十二日長州公御登城ニテ御老中久米大和守殿被召出被仰之趣・・・・
- (十九) 島原御家中江上書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (二十) 久世大和守御役御免願・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (二十一) 三事策伝宣勅書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (二十二) 仮字手本忠臣蔵浄瑠璃文句見立評判・・・・・・・・・・・・
- (二十四) 杵築留守居奥津謀隠居見切之話・・・・・・・・・・・・
- (二十五) 戊八月二日学習院へ松平長門守被召出議奏伝奏両役より御渡し之書付・・・・
- (二十六) 文久壬戌十一月攘夷督促及び攘夷期限奏聞の御沙汰書・・・・
- (二十七) 諸浪士訴状 京師ヨリ送来・・・・・・・・・・・・・・・・
- (二十八) 議奏加勢広幡大納言より被達候口上・・・・・・・・・・・・
- (二十九) 諸司代へ御届之写・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (三十) 寺田屋事件島津家よりの届書・・・・・・・・・・・・・・・・
- (三十一) 勅宣之写…漢章和解幕府へ之勅書・・・・・・・・・・・・
- (三十二) 肥後藩有志之士建議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (三十三) 幕の和学者塙次郎被加天誅其罪状書・・・・・・・・・・・・
- (三十四) 文久三年癸二月十八日攘夷実行の勅書・・・・・・・・・・・・
- (三十五) 千種殿貸付用所賀川一馬殺害に被及の際、奥の間に置かれし書付之写・・・・
- (三十六) 文久三亥年二月十一日鷹司殿下へ三士持参之書面・・・・・・・・
- (三十七) 逆賊足利拾五代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (三十八) 京都警衛担当諸侯割合に付触達・・・・・・・・・・・・・・・・
- (三十九) 太田道淳老中任命辞令・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- (四十) 来五月十日攘夷期限、相違なく拒絶実行の決意に付奏聞・・・・・・・・

(四十二) 長州侯建白自分鷹司殿下へ持参・・・・・・・・・・・・・・・・

(四十二) 関白家へ罷出候列藩有志之もの申立・・・・・・・・・・・・

(四十三) 御同席触如従前万事委任之叡慮二付・・・・・・・・・・・・

(四十四) 英夷より公儀へ差出候書翰和解・・・・・・・・・・・・・・

(四十五) 日本橋老町目町人より御訴・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(四十六) 四月十七日京都三条大橋高札場張札之写・・・・・・・・・・

(四十七) 家茂公帰府之義被相願候所二月廿九日勅諭之趣・・・・・・・・

(四十八) 四月三日再應勅諭之趣・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(四十九) 水野和泉守より大目付を以諸藩へ傳達之趣・・・・・・・・・・

(五十) 両国橋より七八間位手前右側に生首二ツさらし有之、其脇へ捨札有之候

(五十一) 風聞廻状之趣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

正邪録(2)の目次

(一) 上ノ山藩金子与三郎横浜探索始末其外聞書・・・・・・・・・・

(二) 水野和泉守殿於京都御渡候御書付写老通・・・・・・・・・・・・

(三) 文久三年亥六月十五日風今書覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(四) 文久三亥六月平田大角より穴門隠居へ来書・・・・・・・・・・・・

(五) 六月三日学習院へ三条様へ差出候・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(六) 《外夷同腹ノ奴等之偽書》河内守宅へ松平大膳大夫差出候書付・・・・・・・・

(七) 新板当世チヨンカレ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(八) 長州御届《当月五日朝、仏蘭西》・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(九) 六月八日幕府へ御沙汰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(十) 関東へ被下候御趣意《今度於長州攘夷》・・・・・・・・・・・・・・

(十一) 三月六日將軍家初而御参内之節天子様・・・・・・・・・・・・・・

(十二) 平田定太郎謹而奉懇願候・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(十三) 京都より江戸表へ来書之写《六月三日大樹御参内》・・・・・・・・

(十四) 江戸風聞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(十五) 亥七月四日御下け一橋中納言殿へ被成下候勅書・・・・・・・・・・

(十六) 神州規律・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(十七) 亥七月廿一日於大坂幕府より打払見合・・・・・・・・・・・・・・

(十八) 亥八月、英船七艘城下海へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(十九) 七月五日津和野様御留守居山崎傳兵衛より・・・・・・・・・・・・

(二十) 九月六日京都出足御飛脚同廿二日着・・・・・・・・・・・・・・

(二十一) 亥八月十七日京都の騒動中西多門探索・・・・・・・・・・・・

(二十二) 大目付 覚 自国海岸御警衛・・・・・・・・・・・・・・・・・・

- (二十三) 長州之藩退京之砌建白……………
- (二十四) 風説《薩州之戦勝利》……………
- (二十五) 風聞書《天朝より会津侯》……………
- (二十六) 薩州ニテ英吉利ト戦争ノ略絵図等……………
- (二十七) 祇園西之門張札写……………
- (二十八) 戌十月六日夜、柳馬場三条……………
- (二十九) 戌十月十一日河原ニおゐて……………
- (三十) 越前家一定論……………
- (三十一) 乍恐御内々奉言上覚《上杉侯建白》……………
- (三十二) 松山侯御役御辞退書……………
- (三十三) 周州侯建白……………
- (三十四) 近衛殿より鷹司殿下へ被仰入候御書上写……………
- (三十五) 御所御番所割《大和拳兵》……………
- (三十六) 乍恐奉申上候《先代一旦御取潰》……………
- (三十七) 亥九月三藩上京言上之趣……………
- (三十八) 大和之風説……………
- (三十九) 九月中私見聞形《膳所本多十八日御変事》……………
- (四十) 亥十二月五日朝 三条橋へ張札……………
- (四十二) 文久三亥年毛利左京様御室ハ《長州、英仏船との合戦》……………
- (四十二) 亥九月長州にて臣下一統へ……………
- (四十三) 文久三亥年八月六日日本橋之張紙……………

貝塚清直(通称・久吉)の履歴

天保十三年(一八四二)三月 久保田藩十代佐竹義厚公に出仕、大番に入る。  
 弘化三年(一八四六) 五月 御政務所加勢物書

嘉永四年(一八五二) 御政務所物書。

安政二年(一八五五)四月 蝦夷地見分御用付添(軍事係)

安政二年(一八五五)五月 秋田出足。松前、ソウヤ、シレットコ、北蝦夷地に渡海。  
 クシユンコタン、イシカリより同年九月帰国

安政三年(一八五六)五月 知行高一九石九斗八升七合五人御扶持御給銀五〇目

安政四年(一八五七)二月 江戸一カ年詰。その間柳生対馬守宗俊の門に入る。

文久二年(一八六二)四月 三十一代佐竹義堯公、参勤交代御供

文久二年(一八六二)一〇月 義堯公御上京の御先登の為、御家老宇都宮帯刀と江

戸出足、京都藩邸へ

文久三年（一八六三）一月 義堯公御上京。その間徳大寺様御家来香川陸奥助景恒へ

歌学入門

文久三年（一八六三）三月 義堯公の御供にて京都発、江戸藩邸。四月秋田着

元治二年（一八六四）八月 義堯公御上京に付き江戸へ。義堯公上京延引に付、十二月秋田着

慶応四年（一八六八）七月 秋田藩古内左摠次手の戦士として戊辰戦争に出陣

明治三年（一八七〇）二月〜明治二年（一八八九）八月

秋田藩陸軍中尉、秋田県陸軍中尉、秋田第五大区二小区

戸長・仙北郡書記等を務める

明治三七年（一九〇四）二月七日 没。七十五歳

以上